

# より良い社会をつくる一人として 自分で考え行動できる人になってほしい



公民

## 大畑方人<sup>まさ</sup>先生

高島高校（東京・都立）

大学卒業後、半年間かけてアジア諸国を放浪。いくつかの私立中学・高校を経て、2013年度から高島高校で教鞭をとる。教員歴15年。「冷たい頭と熱い心」をモットーに主権者教育やキャリア教育に力を入れている。生活の拠点を東京都文京区と千葉県鴨川市の2地域に置き、週末は家族の住む南房総の里山・里海で過ごす。

### 自分の軸をもって 価値判断できる力を育む

高島高校で「政治・経済」を教える大畑方人先生は、公民科の学びの大きな役割は、生徒の主権者意識を育むことだと考える。教員になって間もない十数年前から、授業で模擬選挙に取り組んできた。ただし、大畑先生が行いたいのは、「投票行動を促す」という狭義

### 見方・考え方

の主権者教育ではない。「平和で民主的な社会の形成者として自分自身の価値判断ができるようにする」という広い意味で捉えて実践している。

「主権者教育は公民科の単元としてではなく、学校生活のさまざまな場面で取り組むものです。それを最も実践しやすいのが公民科ですので、教科全体で取り組んでいきたいと考えています」

大畑先生が第一に目指すのは、生徒が社会との接点のなかで「自分の軸」

をもつことだ。

「社会に関して『どうあるか』という知識だけでなく、『どうあるべきか』という改革の視点も大切ですよ。社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え判断し行動していきけるような、自分の軸をもった価値判断を身に付けてほしいと考えます」

そのうえで「対話」を重視する。

「異質な他者と対話があつてこそ、平和で民主的な社会といえます。考え方が違う人がいるという前提をふまえ、それを排除するのではなく、対話を通じて合意形成していく姿勢と方法を学んでほしいですね」

### 授業デザイン

#### 身近な課題から考え 段階的に自分事化を図る

そうした考えに基づく授業を行うとき、立ちちはだかるのが生徒の「無関心のバリア」だ。

「初回授業では、現首相の所属政党を答えられない生徒も少なくありません。高等教育無償化や奨学金など生徒自身に関係のある問題は多いのですが、なかなか自分の問題として興味をもつことが難しいようです」

そのために、大畑先生は3つの「C」を心掛けている。1つ目の「C」は「キャッチー」で、生徒の気持ちを引きつけるため、現代社会の生の素材を扱い、ディベートや体験活動などの手法を取り入

### 実際の授業の流れ

#### ■テーマ..ぼくらの政党をつくろう

—2017年10月の衆議院総選挙公示翌日に実施された特別授業—

#### 1 導入

各政党首が演説する様子を伝えたニュースを視聴。「今日はこれをみんなにやってみよう」。



#### 2 グループワーク

現在の政治課題の揭示や、新聞記事コピーの配布などヒントを提供。グループに分かれて、自分たちがつくる政党について「政党名」「キャッチフレーズ」の他、「解決すべき社会問題」に基づいた「政策をひとりで表すと」「政策の具体的な内容」「この政策によって将来の社会はどうなる？」について検討。



#### 3 「党首」演説

グループを代表する「党首」がマイクを持って演説。戦争のない平和な国を目指す党、税





**授業例●地域課題解決学習**  
地域住民インタビューやフィールドワークを通じて、住民の高齢化や空き家の増加などの課題の実態を調査し、魅力ある街にするためのアイデアを考え、区役所職員に提案する。



**授業例●模擬選挙**  
実際の選挙公報や新聞記事などを用いて候補者・政党の政策を比較し、各自が投票を体験。後日、実際の選挙結果と模擬選挙の結果を比較し、相違点を分析する振り返りの授業も行う。



れている。2つ目は「カジュアル」で、身近にある課題を扱うことで自分事化を図っている。3つ目は「クール」で、NPOや大学生による出前授業、議員インターンシップなどで魅力的な大人との出会いの場を作り、社会に積極的に関わるのはカッコイイと感じさせている。年間の授業設計においては4つのステップを設定し、段階的に視野を広げていく。まず、最初のステップでは学校という身近な場を見つめ、校則や生徒総会などを題材に、どうすれば高島高校がより良くなるのか議論する。次の

ステップでは地域の課題に目を向け、魅力ある街にするための提案を行う。3つ目のステップで国の課題を取り上げ、例えば「安全保障関連法」や「選択的夫婦別姓」をテーマとしたディベートなどを行う。そして最後のステップで、グローバル社会の課題について「SDGs」(持続可能な開発目標)などをテーマに学ぶ。

また、実際の選挙のタイミングに合わせて特別授業も行う。今年度は10月の衆議院総選挙前に、模擬選挙のほか「ぼくらの政党をつくらう」というグループワークにも取り組んだ(下図)。

「提示されたものから選ぶ」という模擬選挙では、生徒はあくまで受け身の姿勢です。そこからもう一歩踏み込み、より主体的に社会問題の解決について考える機会として実施しました」

### 授業実践の留意点 多様な情報を基に 価値観を形成していく

こうした価値判断を扱う授業は、社会の仕組みを知識として教えるだけの授業にはない、怖さと責任感を感じるという。例えば、死刑制度をテーマにその是非についてグループで話し合ったり、専門家の話などを聞いたりするなかで、意見が変わっていく生徒もいるからだ。だからこそ授業では細心の注意を払う。そのキーワードは「多様性」だ。生徒が多様な考え方に触れられるように、生徒が自ら調べ、提供する資料には賛否両論が載っているものを採用。外部のさまざまな立場の人の話を聞く機会も設けるようにしている。

「主権者教育では政治的中立性の確保が重視されていますが、教員が大切にすべきは、両極の中間を意味する『中立性』というより、社会を多面的・多角的に捉えるための『多様性』と考えるとしつくりきます。多様な考えにふれながら、自分自身の価値観を築いていってほしいと思います」

授業を進めるなかで社会に対する生徒の意識が変化していくと、大畑先生は手応えを感じている。今年実施された衆議院議員総選挙における全国の18歳投票率(抽出調査)は約51%だったが、高島高校「政治・経済」を選択している有権者の投票率は71%。この数字は、社会の一員としての意識が高まったというひとつの表れだろう。

### 教科ならではの「見方・考え方」が社会でどう生きる?

**生徒の声**

日常で社会課題を話すきっかけに  
3学年・平塚菜々子さん  
普段、友達と社会課題について話すことがあまりないので、こうやって授業でみんなと考えを深められるのは、すごく良い経験だなと思います。授業で学んだことを基に周りの大人とも話せるようになるので、それによってもっと知識や考えの幅が広がると思います。

選挙に行きたいと意識が変化  
3学年・富坂亮太くん  
社会のことを何もわかっていなかったのですが、今年度「政治・経済」を学び始めて興味がわいてきて、ニュースをよく見るようになりました。社会についてわからないままだったら、選挙にも行こうという気持ちをもてなかったのですが、今はちゃんと投票には行きたいという意識に変わりました。

**4 賛同する  
政党にシール**  
賛同する政党のシートにシールを貼ることで「投票」。

**5 まとめ**  
関心のある政策分野と、それに対するスタンスが意識できたかを確認。実際の選挙前日に行う模擬選挙につなげる。

金を若年層のために使うという党など、各グループで重点を置く政策はさまざま。